

高等学校における英語の授業を通じた異文化間コミュニケーション能力の育成に関する実践的研究

小山優子

近年、グローバル化が進み英語をとりまく環境が変化してきている。World Englishesという言葉が使われるほど多様な形を持ち、様々なバックグラウンドを抱える人々によって使われ、世界各国で使用される言語となった。また、英語教育においても「コミュニケーションのための英語」が大切だということが言われ始め、様々な改革が行われている。そのような現状を受けて、今後目指されるべき英語教育の在り方を再考すること。そして、それに基づき実際の教室に生きるような実践的な示唆を見出すことは英語教育が新たな展開に向かうにあたり有意義であると考えます。

そこで、本論文では、様々な先進的な事例を扱いながら **(1) 今後目指されるべき英語教育の在り方を再考すること、(2) (1) に基づく実践的な示唆を見出すこと**を目的とした。

論文構成としては、大きく分けて2部構成となっている。第1章・2章の前半部分では、世界の言語政策の事例を参照するとともに、日本での教育のあり方を振り返りながら、第一の目的である、今後目指されるべき英語教育の在り方についての議論を展開している。そして、第3～5章の後半部分では、言語運用能力と異なる文化背景を持った相手と関わる態度等が加味されたものとして Byram(2008)の提唱した異文化間コミュニケーション能力に着目をし、学校教育の現場でどのように育成できるのかという視点をもって、教師・教材・生徒それぞれの観点から調査を行い、第二の目的である実践的な示唆を見出すことへつなげている。

第1章 外国語教育をめぐる現状

本章では様々な先進的事例に触れながら、外国語をめぐる現状の整理を行った。そして、主に言語観に関する知見を得ることができた。外国語教育をめぐる現状として、これまでの日本の学校教育では、どちらかといえば言語運用能力の習得に偏った言語観が主であったが、様々なバックグラウンドを抱える人が集まる中でどう言語能力を捉えていたかについてヨーロッパ言語共通参照枠 (Common European Framework of Reference for Languages: 以下、CEFR と表記) を参考にして考えてみると、言語運用能力に「異文化能力」を含めた複合的なものを「言語能力」として捉えているという知見を得ることができた。そのうえで、視点を日本の学校教育の現場に移し、2017年に発表されたばかりのコアカリキュラム¹を参考に日本の英語教育の方針を見てみると、今後教員養成や研修の中で、言語

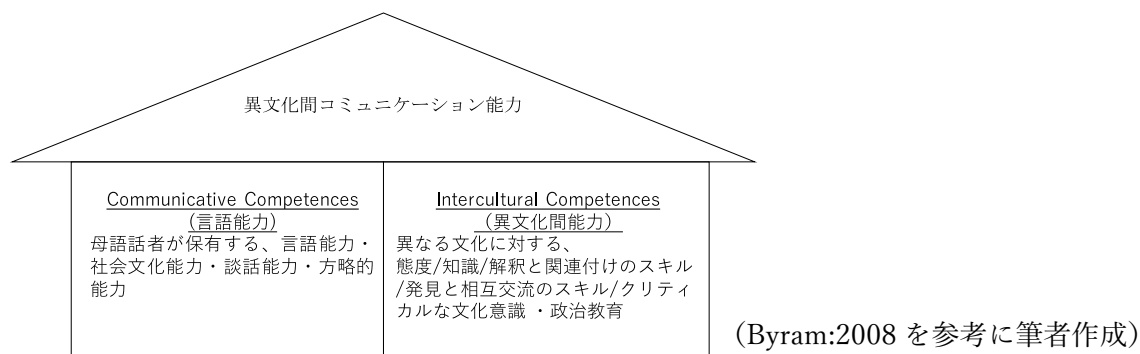
¹正式名称は、中・高等学校教員養成課程外国語(英語)コアカリキュラム / 中・高等学校教員研修外国語(英語)コアカリキュラム。文部科学省から公示され、教職課程・教員研修で共通に習得すべき資質能力を具体的に示したものの。

運用能力に関わるだけでなく、異文化に関する資質能力を身につけることが必須とされ、これまで以上に異文化に関する項目が充実していることが見て取れた。異文化に関するものも含めて、複合的に言語能力を捉える重要性が日本の学校教育の中でも認められ始めたとともに、現場へとその考えが広まる兆しを確認することができた。このような外国語教育をめぐる現状を受けて、外国語教師のこれからの役割として、CEFR などの言語政策などを参考に、固定化した言語を改めることが求められるとともに、生徒が言葉を生み出す能力に加えて、上手にコミュニケーションをとるための態度・知識・技能を身につけられるよう支援することが重要であると考えられる。

第2章 異文化間コミュニケーション能力と英語教育

本章では、第1章の内容を受けて、Byram(2008)の提唱した異文化間コミュニケーション能力について考えるとともに、日本の学校教育の文脈にもあてはめながら論じている。

グローバル化する社会の中で、「文化」というものを、不変で固定化されたものとして考えるのではなく、「コミュニケーションのプロセスの中で構築され、特定の集団の中の相互過程で育まれた共通理解」というようなロジックで捉えるような文化概念のもと、Byram(2008)は、様々な文化背景を持った個人同士が、より効果的なコミュニケーションをとるための資質・能力として、言語運用能力と異なる文化背景を持った相手と関わる態度等が加味された異文化間コミュニケーション能力を身につけることが重要であると述べている。



異文化間コミュニケーション能力という言語観は、言語能力と異文化に関する能力を加味しているかつ、異文化に関する能力についてはそれぞれ詳細な指標のもとに明示されているため、分かりやすく、第1章で述べた今後目指すべき言語教育のあり方が具体化されたもののひとつであると本論文では捉えている。

また、これまで日本の学校教育の現場の異文化教育としては、国際理解教育が主流に行われてきたが、その目的などを紐解いていくと、国際理解教育の理念を実現するうえでも、異文化間話者となることが重要であることが見えてきた。英語教育との関わりで考えれば、異文化間教育の根底にある相互交流というフェーズを授業の中に組み込みやすいことや、ALT という異なる文化的背景を持つ指導者と一緒に授業展開ができる点など、多くの可能

性を含んでいることから、異文化間コミュニケーション能力を育成するにあたって英語教育の役割は非常に大きい関係性にあることも見えてきた知見のひとつである。

第3章：英語検定教科書にみられる異文化間コミュニケーション能力

本章では、授業を構成する要素のひとつである「教材」に着目し、異文化間コミュニケーション能力の育成に適した教材とはどのようなものか、文献や教科書分析を通して明らかにしている。

文献研究から、異文化間コミュニケーション能力を育む教材の3つの特徴を見出し、包括的に考察をした結果、検定教科書は概ね異文化間コミュニケーション能力を育むための要素が含まれていることが見えてきた。また、その上で、より詳細な調査を行うため、Byram(2008)の示した異文化間コミュニケーション能力の詳細な指標を基本として、2段階（予備調査・本調査）での教科書分析を行った。調査を通して、段階はあるものの、比較的多くの異文化間コミュニケーション能力育成につながる要素が検定教科書に多く含まれているという知見を得ることができた。その中で、教師が教科書の内容や記述を、授業デザインに上手く組み込んでいくことで促進されると考えられる項目も多く存在することが明らかとなった。

第4章 教育実践における異文化間コミュニケーション能力の育成

本章では、第3章の内容を受けて、授業デザインについての実践的な手法に関する示唆を得ることを目的に3名の教師の授業分析を行った。分析する視点としては、多くの授業の中で異文化間コミュニケーション能力育成の視点を取り込まれることを期待するため、高度な手法を提示するのではなく、まずは、その足掛かりとして多くの教師が取り入れやすい手法を中心に提示するという視点のもとに行った。

結果として、それぞれの教師の授業分析から具体的な指導の留意点を見出すことができた。3名の授業分析から見えてきた考察としては、学ぶ内容と身につけさせたい資質能力を結びつけるために、教師が適切な学習活動を設定することが重要であることが確認できた。そして、その学習活動を組む際に、留意する点として、(1)学習者中心であること (2)教師の発問が適切であること (3)クリティカルシンキングの視点 (4)多様性に気付かせるような活動であること、という4つの視座を見出すことができた。あくまで3名の授業分析から考察した中から見えてきたものであるため、これだけが全てというわけではないが、異文化間コミュニケーション能力を育む授業デザインへの最初の足がかりとして、重要な知見を示すことができたのではないかと考える。

第5章：日本の高校生の異文化間能力に対する意識

本章では、普段行われているテストでは測られることの少ない異文化間能力に着目し、高校生 175 名を対象としたアンケート調査から、どのくらい身につけているのかについて

の傾向を把握している。方法としては、筆者が Byram(2015)の異文化間能力の詳細な記述文をもとに作成したアンケートを使用し、先進的な優れた授業を行っている教師が在籍している2つの学校の生徒（A 高校2年生 65名、B 高校3年生 109名）に対して実施した。

全体のアンケート結果としては、複数の項目を通じて、高い生徒の意識を確認できた。授業が全て生徒の能力に結びつくということではないが、やはり工夫された授業を受けている生徒の異文化間能力は高くなりうるということはこのアンケートから見えてきた知見である。²第3章で考察したような教材に含まれている気づきを、第4章で述べたような実践的な手法を参考にしながら、授業デザインに組み込むことへの意義が、このアンケート結果からも確認できたのではないだろうか。

以上の議論から、筆者は、最初に挙げた目的に対して以下のような点を確認することができた。

(1) 今後目指されるべき英語教育の在り方を再考すること

第1章2章の部分から、言語観をあたためること、また「文化」に対する概念をより柔軟にするとともに、Byram が示すような異文化間コミュニケーション能力の考えのように複合的に言語教育をとらえて英語教育を行っていくことが、今後目指されるべき姿なのではないかということが見えてきた。

(2) (1) に基づく実践的な示唆を見出すこと

まずは検定教科書のどのような記述が異文化間コミュニケーション能力の育成につながるのかを示せたことはひとつの示唆であると考えられる。また、実際の授業という具体的な事例の分析を通して、足がかりとなる観点や手法を示せたことは、現場に還元されうる示唆になるのではないかと考える。

筆者は本論文の執筆を通して、英語教育の新たな可能性とともに、「ことば」の奥深さというものを感じることができた。「英語を学ぶ」ということの本質的な意味は、想像以上に複雑なものである。だからこそ、英語教育を考えるにあたって多様な視点をもって、英語教育の向かうべき道を模索することが重要なのであろう。そうすることで、日々の英語の授業をより深みの増したものにできるのではないだろうか。

【主な参考文献】

- ・マイケル・バイラム. (2015). 『相互文化的能力を育む外国語教育』. (山田悦子・古村由美子訳) 東京: 大修館書店
- ・Byram, M. (2008). From Foreign Language Education to Education For Intercultural Citizenship. *Multilingual Matters*

² アンケート調査を行ったA高校は、第4章で授業分析を行った教師の担当するクラスである

